神奈川県立秦野曽屋高等学校 学校運営協議会 開催結果

本校の学校運営協議会を下記のとおり開催しました。

会議名称	令和6年度 秦野曽屋高等学校 第3回 学校運営協議会
開催日時	2025/3/10
開催場所	秦野曽屋高等学校 会議室
出席者	【委員】反町聡之、関野浩子、梶山孝夫、佐野典文、鳥海靖史、原 憲治、三浦義政、山田浩之、吉田正也、山口正樹 【 事務局 】佐藤道和、沼田伊里、甲斐 正、廣重直樹、大町友子、齋藤昂良、綿引俊哉、吉崎慎一郎、川島 聡 高橋秀文 、槁本 誠、堀井拓洋
会議資料	令和6年度 秦野曽屋高等学校 第3回学校運営協議会
議事録	◎校長挨拶: ・県立高校改革実施計画について :授業力向上推進重点校 →本校は昨年度に引き続き今年も授業力向上推進重点校になった。授業力向上推進重点校について3ヵ年の実施報告を作成した。 →英検の合格者も出ている。 ◎令和6年度学校評価報告書 実施結果（資料のとおり副校長が説明） ◎各グループの取組について ・学習支援グループ：生成AIについて我々がどう使わせるかどう制限していくかを明確にしていく。電子黒板の「MIRAIタッチ」の研修会を今年度行った。活用方法を今後も研究していく。スタディサプリイングリッシュの活用も含め、成果を上げてきたか。元々英語が得意ではない生徒が英検合格など、生徒の成長を促すことができた。 ・生徒会支援G：まち作り計画策定会議に参加、日頃の成果が認められ生徒会として県から表彰された。 ・生活指導G：教育相談について重点的な取り組みを行った。サポートドッグの実施など。 →今年度は調査をもとに面談を行うなどの試みをした。組織的な支援を今年度は行うことができた。 ・進路支援G：4年生大学、看護専門学校、短期大学の合格者数を資料にて配付。一般受験の合格者が2月20日の資料と比較するとわかる。青山学院、明治、法政、東海などが増えている。 ・広報特色・情報グループ：学校説明会の昨年度と今年度の参加者数の比較を行った。今年度は合計の参加組数が微減している。説明会参加者の減少が志願者数減少の原因の一つでもあると考えている。来年度は増加を目指して改善していく。 ・管理運営グループ：防災備品の整備を推進（折り畳みヘルメットの購入、職員用） ◎意見交換 ・学校評価報告の夏季福祉体験について；福祉人材の育成のために秦野市でもこのような活動を行っているが、本校のみならず市内の小中学校においても同じ状況。コロナ禍で一時休止していたことが影響しているか。 →会長：高校生の夏休みが短縮され、より忙しくなっているように思える。 →総合的な探究の時間にて、福祉実習という形で行っている。 ・地域等との協働：卓球を通して寺子屋を実施した（小学生対象） ・英検の合格者数増については、スタサディーサプリイングリッシュや曽屋塾など独自の仕組みによる成果ではないだろうか。秦野曽屋ならでは（組織的に行った）の授業改善などはあったか。 →組織的に統一したものはないが、「深い学びとはなにか」を各教員が考えた。また、今回はベテランと若手が授業の知識を共有する良い機会となった。 ・地域の方々に向けて挨拶をする生徒が増えない。 ・曽屋塾での韓国語検定について、特化した講師の方がいるのか。→副校長：いる。講師からのすすめで今年度も受検した。 ・地域等との協働：同窓会の入会式挙行について、英検、部活動等、様々な実績が増えているため同窓会としてもなにか協力できることがあれば支援していきたい。福祉体験についても、卒業生のつながりを活用できると考えている。学校説明会ではチラシ、ツール作りなどお役に立てることはないだろうか。外国籍の住民や近隣大学の留学生との交流等、ネイティブな英語・韓国語によるコミュニケーションなどお役に立てそうだ。 ・学校管理学校運営：英検の取得率について、中学生へのアピールの仕方を工夫する必要がある。 ・折りたたみヘルメットについて単価はいくらか。→2000~3000円ほど。 ・卒業式で体育館が非常に寒かった。緊急事態で体育館を使うとなると防寒の対策が必要だと感じた。 →川島先生：アルミシートなどの用意はある。また、教室で寝泊まりをする予定である。 →校長：緊急事態で一般の方が体育館に来た場合は防寒などの対策に現在の備えでは限界がある。 ・電子黒板の使用感に対する質問:これまでの黒板との使い分けが上手くできているか。 →電子黒板は教材への書き込みが可能である。さらに有効な活用方法について検証しているところである。 ・研修会はどのようなものであったか →若手教員が様々な使い方を知っており、それを共有した。生徒も新しい使い方を知っていることもあり、共に学び合いながら行っている。 ・ふれあい美化清掃について →現在はクラスルームで一般の生徒に呼びかけているが、美化委員を中心に行っている。 ・中学校でのフェスティバルには、高校生ダンス部が来てくれて、とても好評だった。そういった機会を通じて、地域の児童生徒が挨拶をし合う関係づくりができると良いと思う。 ・地域等との協働：地域のイベントには、ダンス部の皆さんに来てもらえてありがたく感じている。 ・英検の取得率を示す必要があるのでは。 ・授業力向上推進校としての成果について、生徒アンケート以外に、本当に学力が向上しているかを分析するよう検討してみてはどうか。たとえば外部模試など客観的指標があると考える。 ・大学では生成AIについての進化はめまぐるしいが、学生はそれを丸写ししているような現状がある。自分の意見が反映されている様子が見えない。ICTの怖さを感じる。 ・スライドを書き写すことなく、画面を写真に撮るだけで済ませてしまう生徒についても気がかり。深い学びとはなにか、教員側が意識してリードしていかなければICTの効果は得られない。 ・定員割れについては、駅からの利便性など様々な事情は承知の上だが、それでも倍率を出すにはどうすればよいか、国の施策では私学へ生徒が流れる可能性もあり、今が踏ん張りどころではないか。 ・学校運営のなかで、同僚性についてはどうか。若い教員・ベテランの教員がコミュニケーションを取る機会は十分か。その点について考えてみてほしい。 ・メンタルの不調を抱える教員が多いと聞く。これらのケアもコミュニケーションを活発にして解消できるか。 ・校外における地域の方々への挨拶に関してはリスクも感じる。校内で知らない人でも挨拶できるようになれば良いか。 ◎最後に会長より ・私は大学にて「特別活動論」の講座を担当しているが、「特別活動」の目的のところを是非見てほしい、生徒の資質向上にもつながるものだと考える。